

岡村昭彦の会

1995. 2

NO. 3

没後10年

AKIHIKO忌

次世代に継いでいくものは。

あの日から一〇年

岡村さんと続けた一五年に及ぶ勉強会の期間の三分の二のときが過ぎました。

一〇年前のあの日、ベッドサイドで看護に全力を尽くした人。何をすすすべもなく廊下に立ちつくしていた人。頭をかかえて階段に座り込んだ人。今でもあの時のことがはつきり思い浮かんできます。

「そんなにゆっくりやっていたは二〇〇年生きたって何もできやしない！」という岡村さんの声が聞こえてきそうですが、写真展や目録作成を通じて、生前の岡村

さんを知らない若い人達を中心になった勉強会を続けるころまで来ました。

「AKIHIKOの会」のメンバーそれぞれが岡村さんの影響を背負って生きていますが、岡村さんが残したこと、残そうとしていたことを、その時々目にし、耳にしていた人達が、そのストックをいかに若い世代に継いでいくのが、これからの会の課題の一つだと思っています。

二〇年目の時にどんな結果が出るか楽しみです。
(大住敏子)

第10回「AKIHIKO忌」について

3月26日(日)

午後2時～7時

会場 お茶の水スクエアA館2F (カザルスホール隣)

JRお茶の水駅お茶の水橋出口下車5分

内容 第1部 一四〇〇〇〇 挨拶 ビデオ鑑賞

一四三〇〇〇 講演 浅井久仁臣(交渉中)

一六〇〇〇〇 フロアトーク

第2部 一七〇〇〇〇 パーティ

第3部 一九〇〇〇〇 二次会(希望者)

会費 一万円

申込締切 準備の都合上、必ず出欠を3月10日までに

同封の葉書でお知らせ下さい



・ありし日の岡村さん
・当時の岡村さんと母親たちの会(武蔵野)のメンバー

“何も知らないから言わない”ことと
“常識だからあえて言葉にしない”こととは
表現しないという点において同じである。
が、しかし……。

彼は母親たちに学ぶことを強いた。



●「岡村昭彦を読む」会・年次報告

飽くことを知らない「いま」への関心と
 尽きることを知らない「なぜ」という問いが僕らの道づれ

★早いもので、この勉強会をはじめから毎月つごう一〇回を数えて2年目を迎えることになりました（会場は東京・水道橋、倫理研究所8F会議室・第一土曜日午後1時〜5時）。当初の勉強会登録者は三六人（通信費等の年会費三千円）。生前の岡村昭彦を知らない若い人の参加があり、例会の出席者は最高一七人、最低一〇人、平均で一四人とささやかながら楽しい集いでした。また例会の直後には、基調報告の概要、次回テーマ等を加えた「報告通信」を、進行途中の追加参加者一〇人を含めて毎月四六人の方に送付してきました。一年間の概要は別表の通りです（表A）。

★ご覧いただくわかる通り、この勉強会は岡村昭彦の追善供養やセンチメンタル・ジャーニーではありません。一つは「岡村昭彦集」全六巻をベースにして岡村昭彦の概要を整理しながら追っていくという試みに、もうひとつ「われわれはどんな時代に生きているのか」という「いま」を重ねて考えてきました。六〇年代、七〇年代、八〇年代、そして九〇年代と

いう現在にあって、眼前の何が新しい現象なのか（何が新しい課題なのか）、いうならば超資本主義（消費）社会の真っ直中のちいさな手探り講座の試みになったと思っと思っています。なぜそう思ったかといえば、かつて岡村昭彦が投げ掛けた問いや課題が今なお生きていくこと、著作は岡村昭彦という個性として「いま」に深く参画しているからだといえます。このことは「敗戦と阪神大震災」という括り方をしたくなりそうなお戦後五〇年にもうひとつ一九六〇〜一九七〇年代が、「世紀末」を揺さぶっていることを伝えています。

★大雑把に追っ掛けてきた一年でしたが、振り返って何が成果になったかといえば正直なところわかりません。けれどひとつだけ胸をはるがあります。それは勉強会のメンバーの多くが、そのまま『シャッター以前』2号（3月刊行）執筆の中心メンバーになってもらえたということです。誌面はへちまご期待！の充実した内容になっていくと確信しています。そして勉強会は2年目に入ることになりました。会の形やテーマ等

を含めて今後の展開はどうなるかわかりません（わたしには密かな「隠しテーマ」もあります）。岡村昭彦の晩年の仕事、バイオエシックス・看護医療等についてはまだほとんど触れられていませんし、問いたいことはたくさんありそうです。

★とにかくくぼくらに「いま」への関心があるかぎり「なぜ」という問いがあるかぎり「岡村昭彦」を通してもうすこし先まで踏み込むことができるかもしれません。こんな委員会に興味をお持ちの方、時間がとれたらどうぞご参加ください。

・'94夏の移動宿泊ゼミ・スナップ



生き続ける“オカムラ”

次世代からのメッセージ

<内容>

- ニュージャーナリストの位相 米沢 慧
- 岡村昭彦の写真を読む 中川道夫
- 世界史のしっぽと戦略村 吉田敏治
- 岡村昭彦とパイオエシックス 松澤和正
- 岡村昭彦の中国② 池上正治
- 岡村昭彦を見たとき 小淵美宏
- 「ベトナムとは何か」 宮島安世
- 「解放」とは何かの旅 橋本 龍
- 遠い戦争、見えない戦争との 小野彰子
- 自問自答 岡村昭彦
- 昭彦の幼い頃
- 飢饉の中のピアフラ独立戦争

（『岡村昭彦集』未収録）

<定 価>1,800円

（会員の方は2冊以上お願いします。知り合いの方にもお納めして、資金の回収にご協力下さい）

『シャッター以前』NO. 2——岡村昭彦研究——は校正が出るのを待っているところ。原稿入手に遅れはあったものの、レベルの高い熱気で、三月二十六日のAKIHIKO忌に向け刊行を目指している。その内容は次の通り（順不同）。

岡村の戦争報道の姿勢に現在に先行する原石を探り当てた米沢慧「ニュー・ジャーナリストの位相」。去年の岡村昭彦忌での講演を基に自在にシャッター以後と以前を語る中川道夫「岡村昭彦の写真を読む」。岡村の問題意識と方法論をミヤンマーでの取材をめぐって見事に実証してみせた吉田敏治「世界史のしっぽと戦略村」。「ヴェトナム、その終端なき螺旋」という副題を持つ松澤和正「岡村昭彦とパイオエシックス」。

これらの長編論文に加えて、昭彦忌での話題を呼んだ講演の再録である小野彰子「昭彦の幼い頃」。「飢饉のなかのピアフラ独立戦争」『岡村昭彦集』未収録

（『高一時代』六九年発表）。連載二回目池上正治「岡村昭彦の中国」は、岡村の敗戦直後を「未完の引揚げのなかに原影が」という視点で貴重な資料を用いて追う。さらに小淵美宏「（独舞台）岡村昭彦を見たとき／岡村昭彦再発見」の火花が鋭く交又するような感性によるエッセイ。一九九三年一月ホーチミン市、ハノイ市訪問の体験を芸術・文芸とりわけ「解放文芸」にしばった宮島安世の長編ルポルタージュ「ベトナム」とは何か「解放」とは何かの旅」。宮島のこのルポはある意味では岡村の死後をカバーするものである。橋本龍「遠い戦争、見えない戦争との自問自答」。

以上の内容ではば予定頁を越えるはずで、死後一〇年を経ても、岡村昭彦は一人一人の生の内部に鮮烈な問いを投げかけながら生きていくことを『シャッター以前』NO. 2の発行は明らかにする。

（暮尾 淳）



『シャッター以前』1号の表紙から

事務局より

1. 発会の時お送りいただいた切手六二円×5枚の通信費が、3回の会報発送、送料の値上げ、返信用はがき代、封筒代で底をつきました。今後の通信費として同封の振込用紙で、一〇〇円をお送り下さい。
- 振込用紙は「AKIHIKO忌」参加費、「シャッター以前NO. 2」購入代金、ピデオ／テープ購入代金等にもお使い下さい。
- 「AKIHIKO忌」参加費（二万円）、「シャッター以前」NO. 2購入代金は、前納でお願いします。
2. NHK教育TV、ニュース番組等で放送された生前と没後の岡村さんの映像を二巻にまとめました。「戦乱の中のジャーナリスト、ロバート・キャバ」「二人のフォトジャーナリスト」ほかセットで三千元（送料込）です。
3. 阪神大震災で、鈴木博信さん（西宮市）の家の倒壊をはじめ、安藤隆子さん（灘区）鈴木真理さん（灘区）谷孝恵子さん（北区）難波知子さん（長田区）広重昌子さん（西宮市）堀口禮子さん（東灘区）町田さと美さん（東灘区）三根一乗さん（洲本市）森下敏司さん（西宮市）等の方々被害にあわれました。心からお見舞い申し上げます。岡村さんのようにたくましくこの事態をくぐり抜けて、人間の強さ、弱さを報告していただける日が一日も早く来ることを願っています。
4. 長崎在住の会員の有川徹さんから、著書の「源（こだま）——私にとって国民学校とは」の寄贈がありました。岡村さんと東京時代に交流のあった方。お読みになりたい方は事務局へご連絡下さい。
5. 「読む会」の松澤和正さんの「報道写真家岡村昭彦——戦場からホスピスまで」がNOVA出版から発売。購入希望者は松澤さんまで（〒343 越谷市赤山町1の21 電話048916211536）。